

平成22年度

国土交通省高知西バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

バーガ森北斜面遺跡(三世庵地区)
記者発表及び現地説明会資料



日時 記者発表 平成23年2月17日(木)午前11:00～12:00
現地説明会 平成23年2月19日(土)午後1:30～3:00

場所 いの町是友の発掘調査現場

高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

I 調査の概要

1. 調査の目的

今回の発掘調査は、国土交通省(四国地方整備局土佐国道事務所)が計画している高知西バイパス建設工事に伴い、工事区域内に所在する遺跡について事前に発掘調査を実施して遺跡の内容を記録に残し、地域の歴史復元に役立てようとするものです。

2. 調査対象地

高知県吾川郡いの町是友

3. 調査期間

平成22年5月18日～平成23年2月25日

4. 調査面積

4,037 m²

5. 調査体制

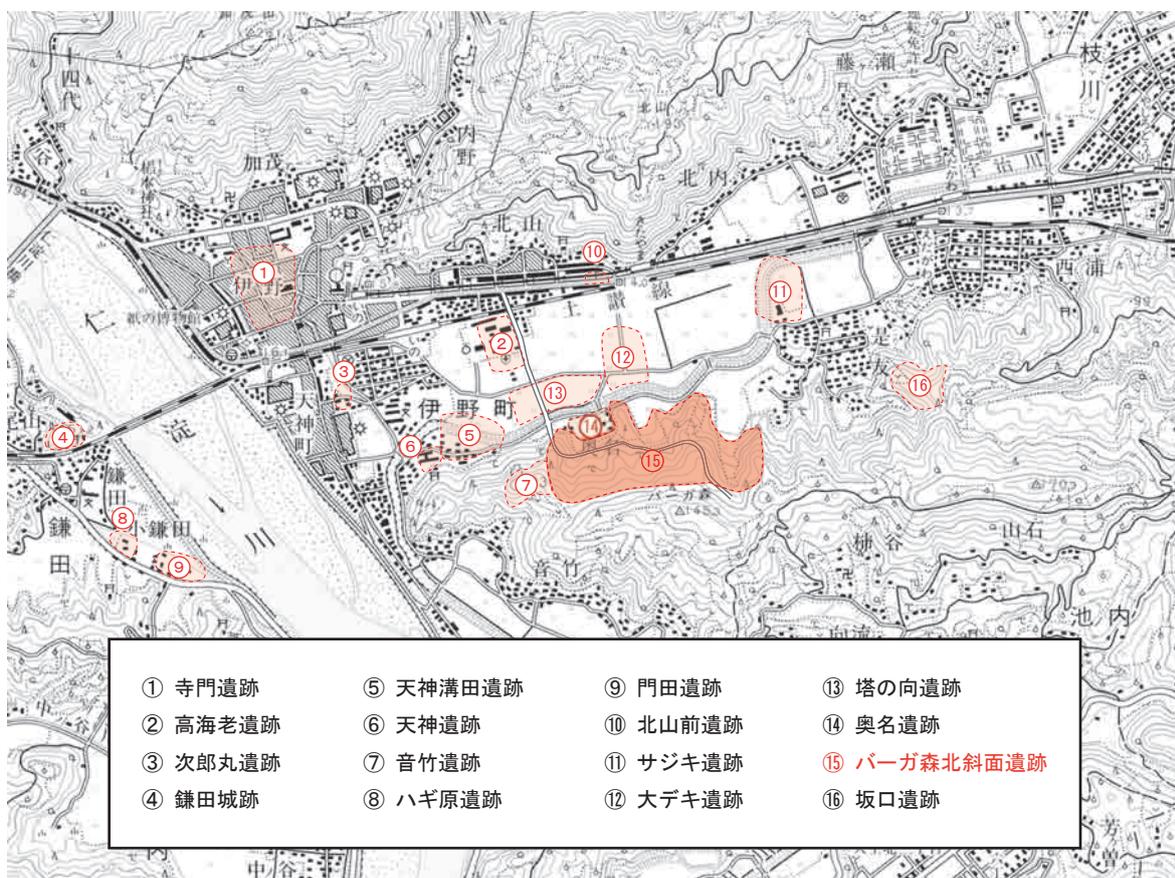
調査委託者 国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所

調査主体 高知県教育委員会

調査実施機関 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

6. 調査協力

国土交通省・いの町・西バイパス工事関係者・地域の方々



周辺の遺跡地図

7. 遺跡概要 —バーガ森北斜面遺跡について—

バーガ森北斜面遺跡は、高知県吾川郡いの町奥名・是友に所在し、仁淀川の支流、宇治川左岸の標高 50～80m を測る丘陵上に立地します。当遺跡は、昭和 32 年(1957)に地元の方が土器を発見し、存在が明らかになりました。昭和49年(1974)と昭和51年(1976)には、三世庵と奥名地区の発掘調査が行われ、竪穴建物跡3棟と、弥生時代中期後半の土器や、石包丁、叩石、打製石鏃、鉄刀子、投弾などが出土し、菖蒲谷を挟んだ標高 50～80m を測る斜面に弥生時代の集落があることが確認されました。特に三世庵地区で発見された竪穴建物跡は、昭和 50 年に「伊野町指定文化財」として登録されています。その後、平成 9 年(1997)と平成 11 年(1999)に、いの町農道改良工事に伴い新崎地点と岩神地点の発掘調査が実施され、弥生時代中期末～後期前半の竪穴建物跡や土坑などが遺物とともに発見されています。

II 調査の成果

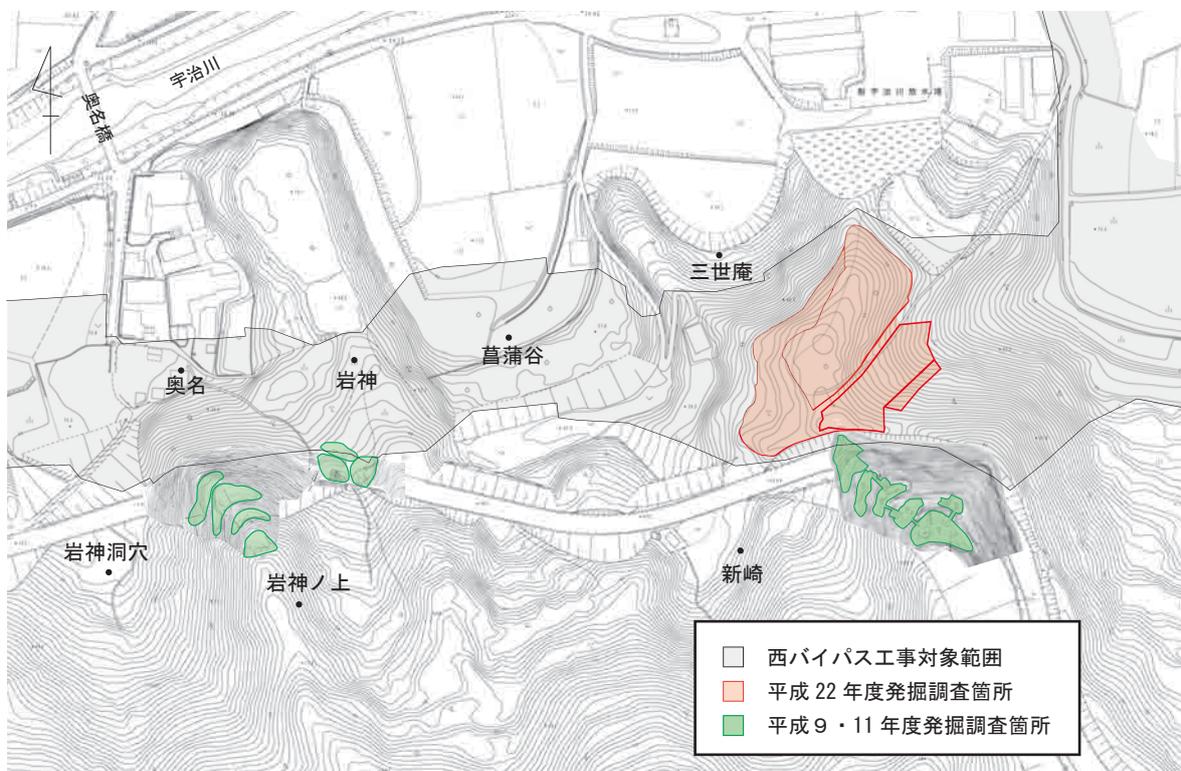
今年度の調査では、バーガ森北斜面遺跡三世庵地区の丘陵部を中心に発掘調査を実施しました。調査対象地には「伊野町指定文化財」として昭和 50 年に登録された竪穴建物跡も含まれており、37年ぶりの再調査となります。



昭和49年5月27日 高知新聞



昭和54年10月24日読売新聞



発掘調査位置図

1. 検出遺構

竪穴建物跡6棟、炉跡6基、土坑40基、柱穴314個、溝9条

調査対象地の南東斜面部、東斜面部で人工的に造成した段部を検出し、弥生時代中期末～後期初頭の竪穴建物跡、炉跡、土坑、柱穴、溝などが見つかりました。段部は、標高42～標高58mラインで4段確認されており、幅4～5m、長さ約20mにわたり山の斜面をL字状に削って平坦に造成しています。この段部では、竪穴建物と炉跡が検出されたことから、住居などの居住空間であったものと考えられます。竪穴建物の規模は、直径3～5mを測る円形であり、一部、貼床(粘土を床に敷く)が認められるものもあります。各建物内には炉跡と思われるピットがあります。また、段部下の斜面では柱穴が並んで確認され、この柱列の性格については明らかにすることが出来ませんが段部で検出された建物遺構と一体的なものとして捉える事ができるのではないのでしょうか。山に営まれた集落の建物構造の一端を知ることができました。

2. 出土遺物

弥生土器(壺・甕・高杯)、石器(石包丁・石斧・石鎌・叩石・砥石・投弾)、鉄器(鉄斧・鉄鎌)

出土遺物は弥生土器と、石包丁、叩石、石鎌、投弾、石斧などの石器が出土しています。弥生土器については、壺、甕、高杯が出土しています。これらの中には南四国独自の土器として位置づけられている土器の一群と、中部瀬戸内の影響を受けた土器の一群がみられ、前者は貼付口縁、刻目、櫛目文など細かい装飾を施す特徴がみられ、後者は凹線文を施したシンプルな土器として弥生時代中期末頃の指標土器として位置付けられています。石器は稲の穂摘具と考えられている石包丁と、狩猟、武器としての石鎌、伐採に使う石斧などの道具があります。これらの石器を加工する際に使用する叩石、砥石、石材も見つかっており、集落の中で石器を加工していたものと思われます。また、直径3～5cm大の球形をした川原石が多数見つかっていますがこれらは投弾と呼ばれている武器であり、特に竪穴建物跡が見つかった東斜面側で多く出土しています。

Ⅲ まとめ

今回の調査によってバーガ森北斜面遺跡は従来考えられていたよりも大きな遺跡であることが明らかとなり、仁淀川流域を代表する集落遺跡として位置付けることができるようになりました。バーガ森北斜面遺跡が営まれた弥生時代中期末(B.C.1世紀)は、全国的に集落の数が増え、その規模も拡大する傾向がみられる時期であり、当遺跡のように丘陵や斜面に「高地性集落」が登場してくることも特徴の一つで、高知県では朝倉遺跡(高知市)や、ムクリ山遺跡(大月町)、本村遺跡(香南市)などを挙げることができます。このような集落は、見通しのきく所に立地していることから見張り台や狼煙台として使われた軍事的な性格の遺跡と考えられてきました。今回の調査でも投弾が多量に出てきていることなどはその側面を示しているかもしれません。しかし、同時に石包丁など生産用具も出土していることから軍事目的だけの集落として単純化することはできません。このような集落が登場してくる背景には、鉄器の普及による生産力の高まりや瀬戸内の影響を受けている土器からも窺えるように他地域との積極的な交流など弥生社会の躍動的な展開があったものと思われます。高知県では弥生時代の躍動時期を変遷していく代表的な遺跡として田村遺跡群を挙げることができますが、バーガ森北斜面遺跡は、仁淀川流域における弥生時代の躍動時期の一端を示す集落遺跡として捉えることができると思います。



段部に造成された生活面（Ⅳ区一段目，西より）



竪穴建物跡（Ⅳ区二段目，西より）



口縁部に刻目のある土器（Ⅳ区出土）



凹線文の入った高杯（Ⅲ区出土）



石包丁（Ⅳ区出土）